報告

TAMA Music Festival 2020 開催報告 A Report on TAMA Music Festival 2020

佐藤 亜矢子 Ayako SATO 東京藝術大学

Cathy L. COX 国立音楽大学 Kunitachi College of Music 平山 晴花 Haruka HIRAYAMA 玉川大学

Tokyo University of the Arts

Tamagawa University

Jonathan F. LEE 玉川大学 Tamagawa University 横山 真男 Masao YOKOYAMA 明星大学 Meisei University

概要

2020年1月に明星大学で開催した TAMA Music Festival 2020についての報告を行う。現代音楽および電子音響音楽に焦点を当てたこの音楽祭は、学際的な観点から先端芸術表現分野の振興を目的とし、東京多摩エリアの大学で音楽と情報科学領域の指導にあたる教員らによって企画・運営された。2018年3月に第1回目を開催して以来、第2回目となる今回は、弦楽器アンサンブルをフィーチャーし、弦楽器を用いた音楽表現の多様性の追究が主要なテーマとして掲げられた。さらに、初の国際的な作品公募を実施し、世界各国から作曲家や研究者が参加した。2日間にわたるこの音楽祭は、4つのコンサートに加え、基調講演、研究発表、リスニング・ルームの各セクションにより構成され、幅広い現代音楽および電子音響音楽の最先端のシーンを提示した。

TAMA Music Festival 2020, a two-day event in January 2020, was the second iteration of the TAMA Music Festival. The inaugural festival, which took place in March 2018, was founded with the aim of promoting interest in contemporary music—especially works of an interdisciplinary nature between sciences and arts—among the local, general public. Like the inaugural festival, the 2020 festival was hosted at Meisei University and organised by composers and researchers working in the fields of music and information science at institutions within the Tama region of Tokyo. New to the 2020 festival was a resident string quartet and related theme, as well as a call for works and papers that expanded the outreach of the festival to include participation by composers and researchers

outside of Japan. The two day event consisted of four concerts, two paper sessions, a keynote speech and a listening room, with participants representing 13 countries and four continents. The festival attracted ample audiences as well as attention from local media.

1. 背景

2018 年 3 月 3 日に明星大学情報学部主催による TAMA Contemporary Music and Art Festival が明星大学で開催された。このイベントは、学際的な観点を取り入れた先端芸術表現分野の振興目的に加え、「最先端の実験的音楽を聴ける・見れるチャンス」として専門家のみならず、現代音楽や電子音響音楽に普段馴染みのない聴衆も取り入れようと、特に地域住民の来場と地域貢献を目的として企画された。運営メンバーを含む7名の作曲家による作品上演と菅野由弘氏による基調講演が行われ、大学近隣の住民も含めのべ約100名が来場、80名収容の会場はほぼ満席となった。

この成功を踏まえ、第 2 回目として TAMA Music Festival 2020 の計画が立案された(図 1)。運営チームも刷新され、主催である明星大学(日野市)、玉川大学(町田市)という東京多摩エリアに所在する大学で教鞭を執る音楽家および研究者 5 名がイベントの企画、運営にあたった。音楽祭のコンセプトは第 1 回目を踏襲し、学術的な観点からの同イベントの意義を尊重するとともに、普段、芸術音楽に馴染みのない聴衆にも新しいパフォーミング・アートについての造詣を深めて頂く機会となるよう、周辺住民の文化芸術学習への貢献を目的として企画運営がなされた。また、大学の公開講座という位置づけから、学生の参加による現場体

験も意図され、大学を超えた学生同士の交流や、専門 家による現場での実践教育も促された。



図 1: TAMA Music Festival 2020 のチラシ

2. 公募

第2回目となる音楽祭は、2020年1月11日、12日の2日間にわたって行われた。第1回目より規模を拡張し2日間のイベントとすることで、前回以上の内容の充実(ie音楽作品および研究の多様性等)を狙い、国際規模での作品と研究発表の公募を実施した。さらに第2回目の音楽祭は、弦楽器アンサンブル(グリーンルームプレーヤーズ)をフィーチャーすることで、弦楽器を用いた音楽表現の多様性に関する追究が主要なテーマとして掲げられた。そのため、作品の公募においても弦楽器を用いた作品の募集を強調する形となった。

作品や研究の公募は、2019年8月から当イベントのホームページでの案内に加え、SNSでの投稿、先端芸術音楽創作学会(JSSA)、日本電子音楽協会(JSEM)、音楽系大学のメーリングリストへの投稿等によって呼びかけられた。公募においては作品の創作メディアを問わず幅広く受け入れる方針をとり、A)アコースティック作品、B)ライブ・エレクトロニック作品、C)フィクスト・メディア作品、D)オーディオ・ヴィジュアル

作品、E) 即興演奏、F) その他、の6つのカテゴリーを 用意した。研究発表の公募には、音楽祭としての主要 テーマだけでなく、幅広く現代音楽に関するトピック の研究を募るため、弦楽器の新しい奏法の提案、新デ バイスの開発と表現方法、現代音楽の作曲家と作品解 説などを例に挙げて募集した。

1ヶ月ほどの公募期間を経て、国内外から音楽作品 と研究発表を合わせて30を超える応募が集まった。募 集期間の短さや知名度の低さに反して、アジア、ヨー ロッパ、南北アメリカの様々な地域からの応募があり、 発表の場を模索する現代音楽、電子音響音楽領域で活 動する作曲家や研究者らの意欲が感じられた。このよ うな国際的なリアクションの背景には、日英2カ国語 での公募内容の発信や、国籍や居住地等の条件を問わ ず参加を呼びかけたこと、さらに、運営チームが持つ 幅広い国際的な人的ネットワークや、SNS による公募 の周知と研究機関への直接的働きかけ、また、音楽祭 の実行にあたり運営側の受け入れ態勢が整っていたと いうことが挙げられるだろう。そして、運営側が企画 当初から重要な要素であると捉えていたことの1つが、 作品や研究の発表に選ばれた発表者には実際に現地に 来て音楽祭に参加して頂くという条件である。それに より、同領域に関わる新たな国際ネットワークの構築 と交流の促進が強く望まれた。

発表作品と研究の選考は運営メンバー全員の審議によって行われた。より多くの作品を上演したいという意見を考慮し、当初予定していなかったリスニング・ルームを設置することが選考の際に決定した。フィクスト・メディア、オーディオ・ヴィジュアル作品がリスニング・ルームのプログラムとして選択された。

3. コンテンツ

3.1. コンサート、リスニング・ルーム

2日間で4つのコンサートが行われ、それぞれ4~5 作品が演奏された。各コンサートのプログラムは、両 日様々な編成の作品をプログラムすることを意識しな がらも、初日はアコースティック、2日目はエレクトロ ニクスの側面に着目した作品が軸となった。また、各 回のコンサートにおいても、国籍や性別についての多 様性のバランスも考慮したプログラム設計を行った。

各コンサートでは運営メンバーが順に司会を務め、 演奏の前には作曲家本人が舞台に上がり作品について 解説することで、聴衆が現代音楽を理解する上での障 壁を取り除くことが試みられた。また、日本人と外国 人双方への配慮として、運営メンバーが日英相互の通 訳を行った。これはコンサートのプログラム・ノート や研究発表の概要においても同様で、日本語と英語の 両方のバージョンが用意された。

音楽祭1日目(コンサート1、2)は、管弦楽アンサ ンブル「グリーンルームプレイヤーズ」の5名がゲス ト演奏家として登場し、アコースティックの弦楽四重 奏、ライヴ・エレクトロニクスを伴うアンサンブル曲 など多彩な編成の作品を演奏した。

音楽祭のスタートとなるコンサート1のプログラム は、オランダ人作曲家 Rozalie Hirs 氏による弦楽四重 奏曲《Zenit》(2010)のアジア初演で幕を開け、続いて 佐藤亜矢子/Yôko Higashi、伊藤美由紀、松村誠一郎、 Daryl Jamieson 各氏による作品が上演された。このコ ンサートでは、ダンスと電子音響とのコラボレーショ ンやユニークな舞台演出の要素もプログラムの特徴と して挙げられる。

続くコンサート2では、Ricardo Climent、横山真男、 牛島安希子、招待作曲家である山本和智各氏の作品が上 演された。山本氏による《軌道 A》(2017)は独奏チェ 口のための作品で、同氏の《ヴァーチャリティの平原》 シリーズ第1部の第3楽章にあたる。タイトルは弓の 描く軌跡に由来するもので、エレクトロニクスを介さ ないチェロの深い音響が提示された。また、英国マン チェスター大学でインタラクティブ音楽作曲の教授を 務め、作品を通じてテクノロジーとヒューマニティに 関する問題を追究している Ricardo Climent 氏は、作曲 家自らが「仮想ヴァイオリン奏者」として舞台に上が り、「非仮想ヴァイオリン奏者」との「対決」を行う作品 《Duel of Strings: Non-Virtual Violin vs. Virtual Violin》 (2019)を発表した。ゲーム画面のごとき映像と大きな ロープによる「仮想ヴァイオリン」は様々な客層から の関心を集めていた(図2)。



図 2: Ricardo Climent 氏のリハーサル

音楽祭2日目(コンサート3、4)は、弦楽器演奏を 含む作品に加え、フィクスト・メディア作品やモジュ ラーシンセサイザの即興演奏も行われた。

das Fassianos、Iannis Zannos、招待作曲家で基調講演

を行った莱孝之各氏による作品が発表された。莱氏の 《Active Figuration》(2009) は、コンサート2における 山本氏のアコースティックなチェロ独奏曲とは対照的 に、ライヴ・エレクトロニクスを駆使したヴァイオリ ン独奏曲であった。「さまざまなリアルタイム音声信 号処理技術によってヴァイオリンの音が拡張されてい く」(プログラム・ノートより)ことにより、単一の楽 器から生まれる多彩な音響で空間が満たされた。また、 フィクスト・メディアや、ダンサーと電子音響とのイン タラクションを含む作品も2曲含まれ、作曲アプロー チの多様性が窺えるコンサート内容でもあった。

音楽祭最後となるコンサート4においては、Johnathan F. Lee、Agustin Spinetto、黄佩芬各氏、そして招待作曲 家として、ユニットとして活躍する mode-rate (今井慎 太郎、草間敬各氏)の作品が上演された。 mode-rate は、 Ableton Live と Max を用いた《Mode-rate# 20200112》 (2019-20)を演奏し、「ポップとアブストラクトの両極 間に特異点を見いだす試み」(プログラム・ノートよ り)との言葉通り、先鋭的ながらも親しみやすさを兼 ね備えたライヴ・パフォーマンスにより、この音楽祭 を活気とともに締めくくった。また、東京在住のアル ゼンチン人作曲家 Agustin Spinetto 氏による《A Short Period of Time and Sound》(2020) は、Spinetto 氏らの 研究チームが開発した AudioSteller というソフトウェ アを用いたパフォーマンスが行われた。星図にも見え る映像とオーディオのインタラクションは見た目にも 美しく、観客の興味を惹き付けていた。総じて国際性、 学際性豊かなプログラム内容であった。

リスニング・ルームについては、コンサートや研究 発表の合間に聴衆が自由に出入り可能なスペースとし て2日間にわたり設置され、そこではコンサート演奏 とは異なる形で一連の作品がループで上演された。研 究発表会場教室脇のサラウンド設備を備えたシアター をリスニング・ルームとして開放することで(図3)、 より専門的な内容になりがちな研究発表の時間の代替 的コンテンツとしても機能するよう意識されている。 リスニング・ルームに含まれた作品および作曲家は、 オーディオ・ヴィジュアル作品に石井紘美氏、フィク スト・メディア作品に Felipe Otondo、Paolo Pastorino、 Paul Ramage 各氏である。リスニング・ルームは全て の作曲家が海外在住であり、また、その演奏形態ゆえ、 コンサートや研究発表とは異なり音楽祭への現地での 参加は必須とはしなかった。リスニング・ルームは、快 適な座席を備えた静かな、音楽鑑賞のための特別な空 コンサート3では、平山晴花/Bettina Hoffmann、Epameinon-間で、コンサートの合間など、多くの観客に有効に活 用された。



図3: リスニングルーム会場

4. 研究発表、基調講演

研究発表は4名の発表者によって行われた。うち3名が英語による発表だったこともあり、とりわけこのセッションでは、現代音楽や電子音響音楽領域に関わる専門家方の関心を強く集める結果となった。一方で、この時間を利用してリスニング・ルームのプログラムを鑑賞する観客も見受けられ、思惑通りリスニング・ルームが機能した結果ともいえる。

1日目の2つの研究発表は、コンサート1で上演され た作品の作曲家によるものであったが、その内容は両 者ともに哲学的な性格によるもので、それぞれの方法で 知覚や認識に関する考察が提示された。日本在住のカ ナダ人作曲家 Daryl Jamieson 氏の発表『Instruments in Fields: an Intercultural Approach to Understanding Music Incorporating Field Recording』は特に学術的で哲学的な 内容であり、西田幾多郎、上田閑照ら京都学派の思想を 引き合いに出し、知覚・聴取の概念へのアプローチを論 じた。これはしばしば引用される、James Gibson など 他の西洋哲学者によるエコロジカル・パーセプションの 思想とは対照的な観点であった。続く発表は Cathy L. Cox 氏による Rozalie Hirs 氏へのインタビューであっ た。音楽祭の幕開けとして演奏された《Zenit》につい てと、作曲に対する Hirs 氏の哲学的・美学的アプロー チについて焦点が当てられた。化学工学者としての彼 女の以前のキャリアが、音響の素材や音響心理現象を 掘り下げる一種の研究としての作曲へのアプローチに どのように影響を与えているのか、また、どのように してこれらの音響心理現象の中で「美しさ」を感じて いるのかが語られた。

2日目の2つの研究発表は、技術的な面に着目した内容であった。大久保雅基氏は、『複雑な時間軸設定が可能な動的楽譜システムの開発』として、自身の開発したシステムについての技術的解説を行った。ギリシャのイオニア大学で教鞭を執る Iannis Zannos 氏は、『Experiments

with Wearable Motion Sensors in Interactive Dance and Music Performance』としてコンサート 3 で上演された同氏の作品《Izutsu-Dafnis-Echo Fantasy》 (2019) において用いられたウェアラブル・モーション・センサーのデモンストレーションを、出演者であるダンサーと共に行った。

基調講演では、菜孝之氏による『インタラクティブ・コンピューター音楽:コンピューターと楽器の協演』についての発表が行われた(図 4)。同氏の過去の論文等も参照しつつ、インタラクティヴ・コンピュータ音楽の歴史を概観した上で、自身の作品に関しての説明がなされた。特に初めてコンピュータ音楽作品やその研究に触れる者にとっては、その領域のガイドとなるようなコンピュータ音楽への導入としての知識が詰まった内容であり、また、コンサート3で上演された同氏のライヴ・エレクトロニック音楽作品を解釈する上での手がかりともなる講演内容であった。



図 4: 莱孝之氏による基調講演

5. 音楽祭を終えて

2日間の来場者数はのべ約100名。ローカルテレビのJ-COMの取材や、毎日新聞、東京新聞等による広報活動も功を奏し、家族連れの地域住民、作曲家、大学教員や研究者、学生など多様な顔ぶれが観客席を埋めた。また、第1回目に比べ、発表者だけでなく観客の顔ぶれもグローバライズされた印象であった。

来場者からは、「コンピュータを用いてこのような面白いことができるのかという発見があり面白かった」や、「肩肘張らずに身近なものとして現代音楽を感じることができた」という好反応が得られた。国内からの参加者はもとより、ギリシャ、英国、オランダ、カナダ、台湾などから上演・研究発表のために来日した参加者からも、次回の開催を期待されるなど前向きな意見が得られた。地元の地域住民から専門家や研究者ま

で幅広い観客層に満足度の高い音楽祭を目指すという コンセプトに対しては、満点とはいかないものの及第 点と呼ぶにふさわしい結果であったといえよう。

また、大学の公開講座としての位置付けから開催目 的として掲げていた学生の参加による現場体験につい ても、運営チームが教員を務める大学の学生がスタッ フとして参加することで、普段大学で学んだ知識を実践 として活かす好機となった。さらに、グローバルに活 躍する作曲家や演奏家らと直接交流が行われたことで、 学内での活動ではなし得ない貴重な体験ができたこと と思われる。東京都心ではなく多摩エリアという東京 の非中心地で、先端テクノロジーと現代芸術に関わる 国際的且つ多彩なパフォーミングアートシーンを提示 することは大変意義深いことであると考える。翌年に 開催を計画している第3回目の TAMA Music Festival 2021 においても、引き続き国際的、学際的な視野を持 ち本分野の振興に貢献していきたい。特に、Covid-19 を期に刻々と変化する昨今の社会的状況下において、 今後は、パフォーミングアートの実践についての課題 も考察し、チャレンジ精神をもって新たなスタイルも 含め追求していきたいと考えている。

6. 参考文献

TAMA Music Festival 2020.https://tamamusicfes.jimdofree.com/ Accessed July 12, 2020.

7. 著者プロフィール

佐藤 亜矢子 (Ayako SATO)

東京藝術大学大学院音楽研究科博士後期課程修了。 リュック・フェラーリの作品研究で博士(学術)取得。主 に電子音響音楽、アクースマティック音楽の分野で活動。 作品は国内外の音楽祭や国際会議のコンサートに多数 入選。Destellos Competition 佳作 (2013)、Prix Presque Rien 第三位 (2013) 等受賞。現在、東京藝術大学専門研 究員、玉川大学、東京電機大学、大阪芸術大学非常勤 講師。

キャシー・コックス (Cathy L. COX)

現代音楽・電子音楽の作曲方法、テクノロジーと音 響芸術の交差点、又は聴覚に基づいている分析方法を 専門とする音楽理論・音楽学者。カナダ・マギル大学 音楽院音楽理論専攻卒業、米国・ワシントン大学セント ルイス大学院修士課程修了、米国・コロンビア大学大 学院博士課程修了。独国・ベルリン工科大学に DAAD 奨学生。また独国・アーヘン工科大学に情報学を学び。

現在、玉川大学、国立音楽大学大学院、桐朋学園大学 非常勤講師。

平山 晴花 (Haruka HIRAYAMA)

作曲家、パフォーマー。インタラクティブな音楽作 品の創作と研究を専門とする。国立音楽大学大学院修 了後、英国マンチェスター大学にてエレクトロアコー スティック作曲を専攻、博士号取得。第32回ブール ジュ国際電子音楽コンクールレジデンス賞、IAWM 主 催女性作曲家による Search for New Music コンクール 2012 ポーリン・オリヴェロス賞を受賞。主要国際会議 や音楽祭での入選も多数。現在、国立音楽大学大学院、 玉川大学、千葉商科大学、明星大学非常勤講師。

ジョナサン・リー (Johnathan F. Lee)

ディジタル・サウンド・アーティスト、作曲家。コ ロンビア大学で音楽の学士号、修士号、博士号を取得。 現在、玉川大学芸術学部メディア・アーツ学教授。作 品の様式は多岐にわたり、器楽曲に加えて、信号処理 技術を用いた独自の多層的な信号処理を特色とする電 子音楽およびコンピュータ音楽作品を制作して即興パ フォーマンスもする。制作された作品はアジア、南北 アメリカ、ヨーロッパで上演されている。ソロとコラ ボ・アルバムや DVD が国際リリース。

横山 真男(Masao YOKOYAMA)

1973 年広島生まれ。5 歳よりヴァイオリン、10 歳 よりチェロを始める。早稲田大学理工学部および同大 学院を修了。卒業後、脱サラしてヤマハ・ポピュラー・ ミュージックのチェロ講師や室内楽の演奏活動を始め る。同時に編曲および作曲活動も開始。作曲を久留智 之に師事。東洋大学にて博士(工学)を取得し、現在、明 星大学情報学部准教授としてコンピュータや数理を用 いた作品から、日本的要素を取り入れた作曲、クラシッ クや Jazz、ポピュラー音楽などの編曲、音楽情報処理、 楽器音響等の研究に従事。作品はヨーロッパや国内の 著名アーティストから愛好家まで演奏され、Universal Edition や Yamaha Music Media 等から出版されている。

この作品は、 クリエイティブ・コモンズの 表示 - 非営

Creative Commons, PO Box 1866, Mountain View, CA 94042, USA \$ でお手紙をお送りください。